SEIKO HOUSE（セイコーハウス）

東京都中央区

左手首にちょっとした重みを感じ、ステンレスの光を何度も見ていたような気がする。1970年4月、中学1年生になった筆者は、その左手首の腕時計に心が踊った。両親からの祝いの品だった。当時、腕時計を初めてするのは一般的に中学生からで、「大人」の証だった。セイコーの腕時計は代表的ブランドのトップを走っていた。

本拠地を流行の発信地であり、過去と未来の邂逅の地でもある東京・銀座4丁目に構えた。創業から14年目の1895（明治28）年のことだ。服部時計店（現セイコーグループ）の礎がここから始まった。時計塔は当初から店のシンボルだった。その後、都市化の流れで建替えが決まり、1932（昭和7）年、同地に現在の二代目時計塔が完成した。SRC造地下2階地上7階の規模を持つ。設計は渡辺仁建築工務所。

モダニズム建築が台頭するなか、服部時計店の強い意向で、最新技術を取り入れつつネオルネッサンス様式が採用された。外壁に御影石、店内の壁面に大理石、大きな窓にアラベスク模様の装飾が施され、重厚な趣が伝わってくる。交差点に面する大胆なRのデザインは、時計塔を中心に美しいシンメトリーを描く。これは90年ほど前のオープン当時と変わっていない。

時計塔の建物は、セイコーの小売部門を継承した和光の名から和光本館の名称で営業してきたが、2022年に「SEIKO HOUSE（セイコーハウス）」として再出発した。塔の4面に設置された時計の動力は、鐘巻き上げ式からクォーツへ、そして更に高精度のクォーツに取り替えられ、2004年にはGPSシステムを導入した。最新技術によって昔も今も正確な時を刻む。

国内外の賓客をもてなす応接室は、創建された約90年前の面影を色濃く残している。装飾的な壁紙、シンメトリーを感じさせる木製パネル、シャンデリア風の壁付け照明など、アールデコ調の内装にモダンがミックスした空間だ。かつては社長室としていくつもの重要な決断が下された。部屋の役割は変わったが、重厚な雰囲気は訪れる人を魅了し続けている

1～2階西口階段

応接室に施された柱や梁の装飾

撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）